

名前	テーマ	今回の気づき	意見・感想など
杉原環樹	<p>スタディのアーカイブに関わるライターとして参加していますが、個人的にも清宮陵一さんの模索されている音楽の新しい領域に関心があります。新しい領域は新しい領域ゆえに、「言葉以前の感覚」のなかで揺らいでいるもの。このスタディを通して、そこからどんな音楽の姿が見えてくるのか、それをどのように言葉にすればいいのかを、同席させてもらいながら考えていきたいです。</p>	<p>CREATIVEMAN PRODUCTIONの平野敬介さんを迎えた今回のスタディ。「探究心を持った音楽ファンが集まれる場所」としてのサマーソニックや、「賑やかしてはなく時代ごとのテーマを見せるショーケース」としてのAlternative Tokyoなど、平野さんの活動の紹介を通して、コンサートプロモーターという仕事が単に興行の企画運営や営業を行うだけではなく、音楽の新しい受容のかたちを生み出す仕事であることが分かった。</p> <p>興味深かったのは、2010年ごろにサマソニが安定期に入り、いままでのパイを守るという保守的な考えが芽生えた時期のお話。「トライ&エラーのエラーがなくなると仕事に覇気がなくなってしまう」と、平野さんはデ・ラ・ファンタジアという新しいフェスに関わり始めたという。また、Alternative Tokyoを始めるひとつの動機は、「音楽探求の旅をやめてはいけないという使命感を感じた」ことだとも語られていた。このように、平野さんがフェスというものを自分のアイデンティと結びつけて語る姿は印象的だった。</p> <p>スタディの過去回との関係で言えば、第4回のゲストで、「TAICOCLUB」を主宰していた安澤太郎さんのお話とリンクさせると、いろいろと面白い時代の流れが見えてくるようにも感じた。たとえば安澤さんは、フェスの一過性や積み重ねの不足に疑問を感じ、「TAICOCLUB」を終了。現在はより日常的な蓄積に重点を置いた新しい施設を構想していた。いっぽう平野さんは、2018年のサマソニは大ゴケをしたと語り、そのなかでも人が集まったのは、音楽を聴く環境づくりにこだわった「ピーチステージ」だったと話す。お二人の話からは、観客がフェスや音楽に求めるものが、「熱狂」や「ハレの場」というものから、生活や（一緒に訪れた友人や恋人などとの）人間関係を彩る何かへと変化しているのではないかと、という符号のようなものを感じさせた。</p>	<p>感想ではないが、今回、清宮さんから、「角銅真実さんや小田朋美さんなど新しい世代のミュージシャンは、商業的なポップミュージックの世界と、非商業的なアートプロジェクト的な現場を自然に越境できてしまう」というお話があって面白かった。そうしたプレイヤーがますます増えたとき、このスタディの蓄積にもあらためて意味が出てくるのではないかと思う。回を重ねるごとに、このスタディが切り取っている音楽の風景の現代性、重要性を感じる。</p>
蟻川小百合		<p>レコードやフェスといった形にこだわらず、探求心によって変化を起こしていけるような人が必要なのではないか。お話を聞いて、そう思う。きっと平野敬介さんや清宮陵一さんはそういう人だ。しかし決して容易なことではない。本来は、産業としての音楽業界、企業が担えることの一つとして探求や実験があるべきなのではないかと思った。目先の利益を追求するだけでなく、次世代のアーティストや新しい聴衆、受け容れる社会をつくる。</p> <p>音楽産業はテクノロジーの発達とともに目まぐるしく変化してきたと認識していたが、平野さんの話からは、現在では変化に追いつけなくなり遅れをとっているような状態なのではないかと感じる部分もあった。</p>	<p>実際にオルタナティブトキョーやサマソニ、ライブミュージックなどに足を運んでみたいと思いました。</p>
村瀬朋桂			<p>Alternative Tokyoのコンセプトをじっくり聞けたのが、個人的に感激でした。</p> <p>渋谷という場所を選んだ理由、選んだアーティスト、転換の音楽へのこだわりなど。そこかしこに、好奇心を刺激するポイントや試行錯誤がつまっていて、このイベントに行ってみたいと思いました。東京はいくらでも音楽に出会える環境は整っているし、さらにネットでいくらでも音楽は聴けてしまうから、そのイベントがどういものかという考えや思想が人を動かすんだと改めて思いました。もっと音楽家の思想が見えてくると、いいんだらうか。コミュニケーションがSNSによって手軽になったからこそ、丁寧に伝えていくことが大切だと感じました。</p>